

小中学校国語科書写の教員養成の授業における 批評学習の意義

Significance of Critical Practice in Teacher Training for Teaching Handwriting in Elementary and Junior High School Language Classes (Shosha)

田畑 理恵

TABATA Rie

抄録：

Elementary and junior high school language syllabus teaches the skill and knowledge of handwriting to write regular letters basically. On the other hand, the purpose of teaching calligraphy in high school art departments is to develop the skill of and an appreciation for the beauty of calligraphy. However, the practice of learning calligraphy began as the pursuit of finding alternative meanings in letters that were primarily invented as signs to introduce words. Therefore, it is important to utilize the practice and sensibilities of calligraphy in handwriting as a school subject, especially considering how the opportunity to write letters is decreasing in the present age.

In teacher training for elementary and junior high school language handwriting, the effectiveness of practice was found to be due to both language review and skill acquisition. Simultaneously, critical practice was found to foster interest in letters and writing letters. The study includes the results from a student opinion survey as well as a review of the student comments. The significance of the study—as it pertains to teacher training for elementary and junior high school language handwriting—is considered based on the close relation between the learning of handwriting and calligraphy.

著者キーワード：書写、批評、技能、書道、教員養成

論文要旨：

小中学校国語科書写は、正しく整った文字の知識を得てそれを書く技能を習得する学習である。一方、高等学校芸術科書道の学習内容は、書道の美を求めて鑑賞や技能習得を学習する。しかしながら、言葉を伝える記号である文字を書くなかに、文字が持つ新しい一面を見いだすことで書道の学びが生まれたことは理解されている。文字を書く機会が減少している現代であることを考えると、書道の学びの原点となる感性を育む場としての書写の学習の側面を活用することが重要と考える。

小中学校国語科書写の教員育成の授業において、批評という言語活動を取り入れる実践

結果から技能取得への有効性が見いだせる。それと同時に、批評することが文字についてと文字を書くことへの関心を高めていることが、学生による自己批評の内容の変化や批評を行った学生への意識調査の結果に示されている。それらの結果を示しながら、小中学校国語科書写の学習内容を書道の学びとの関係性から考察した上で、小中学校国語科書写の教員育成の授業における批評学習の意義を考察した。

1. はじめに

小中学校国語科書写の教員養成の授業において、実技の課題提出時に自己批評を行うことや他の学生との相互批評を行い、それらの批評の内容の変化と技能習得の関わりを調査した¹。また、批評を行うことが、国語科書写の指導を行うための学習としてどのような効果があるかについて、学生の意識調査を行った²。それらの結果から、小中学校国語科書写の教員養成の授業において、批評を行うことは、技能習得に有効であるかを考察してきた。書写の学習における自己「批正」は、自分の書いた文字を教材と比較し、学習目標を考慮して、修正点を言葉等によって書く学習であり、学習者が互いに相互批正を行うこともある。一方、本稿の書写の教員養成の授業では、授業内で行う批評学習が技能習得に有効であるだけでなく、書写の授業実践では直截に表れないが書写の授業を行う意義の理解に繋がる学習内容への深い理解を促すことを目的としている。「批評（よい点・悪い点などを指摘して、価値を決めること）」という言葉を用いたのは、技能習得に有効であるという視点からであっても、必ずしも教材と比較して修正していくことだけを行うのではなく、客観的な視点をもって自分で評価していく学習を含めようと考えたからである。本稿における批評学習は、美術教育における批評の学習論を参考にしている。直江俊雄は、美術批評の学習手続きとして「記述・分析（形態分析）・解釈・判断」を挙げているが、本稿における批評も、教材と比較し自らが書いた課題を修正・訂正するだけでなく、それらすべての要素を含んだ活動であると認識している³。

批評を授業に取り入れることによって、客観的な視点を得られることは、技能習得の学習に有効であり、その視点は指導者としての視点に繋がる。そして、批評することによって、学生自らが紡ぎだした言葉は、指導するための的確な言語の蓄積となる。さらに、課題に合わせた批評学習の反復によって、書写の学習内容の一層深い理解に繋がる。これらのことは、学生が教員となったときの授業実践において、指導者として求められる技能に関わる学習に効果的であるとして、批評学習の意義として考えることができる。

しかしながら、教員として指導していくのであれば、書写の授業実践が可能である技能や知識を習得することを目標とするだけでなく、書写の学習が何を目指して行われているかの深い理解が必要であると考え。平成25年の全国大学書写書道教育学会におけるシンポジウムで指摘されたように、手書き文字は文化であるという視点が学習指導要領に盛り込まれても、書写を教える教員がその理解をもって指導ができるかが疑問視される現状があり、書写の指導者が書写の学習の本質を理解することを促せる研究が求められている⁴。そしてこの問題は、小中学校国語科書写の教員養成の授業においても意識されなくてはならないことは明らかである。本授業実践においては、書写の授業を実践できるための技能

と知識の蓄積を行うことだけを目標とするのではなく、そのような書写の学習の底流を流れる学習の意義を理解するように学生に対して発している。

その一方で、文字と文字を書くことについて批評を行うという言葉を使った学習によって、学生が書く批評の文章が、批評によって書写の学習内容の背景に言及し、書写の学習の根幹に触れるような内容にまで深められていることに注目してきた。小中学校国語科書写の教員養成の授業における批評学習は、技能習得の有効性を高めるだけではなく、書写の学習の意味を深く理解することを促すことができる。そのような、書写の指導実践のための学習において、これまでない批評学習の捉え方をすることによって、小中学校国語科書写の教員養成の授業における批評学習の意義を考察したい。

2. 技能習得に関わる批評学習とこれからの展望

教育学の研究者である生田久美子は、身体から身体への学習を「人間が生きていく上での一つの認識の表現として捉える新しい「知」のありかたを示唆」すると考え、知識の蓄積を行う学習に身体の学びを取り入れていくことの学習効果を考察している⁵。身体から身体へ伝えられる学習と、知識を得ていく学習が、互いに働きかけ合いながら深める両義的な学習は、アクティブラーニングが提唱される今日の教育の在り方を考えるうえで重要な働きが期待できる。書写の教員養成の授業において、技能習得を目的とした批評を行う学習は、身体から身体への学びに知識を蓄積していく方法の学びが加えられたとも考えられ、それは、両義的な学習が行われる具体的な一つの形として示されたともいえる。

そのように考えると、批評という言葉による学習を差しはさむことは、技能習得という身体から身体への学習に、書写の学習目標に合った文字を書くためにどのように身体を動かすかを言葉に表すとも言え換えられる。批評を行うなかで、学生は自らの身体の動きを客観的に認識し、自己や他者の書いた文字に対しての客観的な視点を持つことが可能になると考える。そして、得られた客観的な視点は、技能習得の学習に有効となるだけではなく、学習の要点を認識する指導者としての視点を養い、批評として表された言葉は、指導するための的確な言語として獲得・蓄積されることが期待される。本授業実践の批評学習の内容を図1. に表し以下に示す。

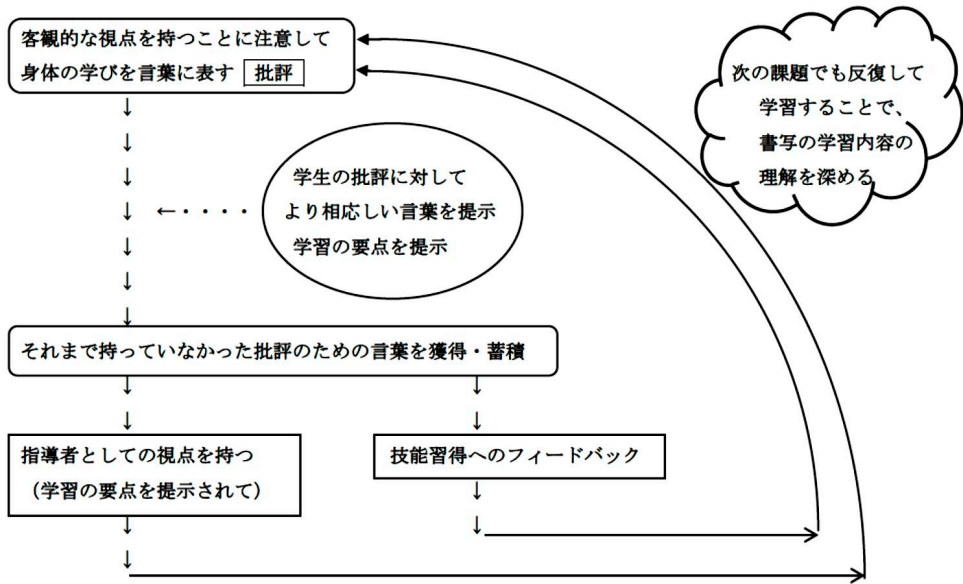


図 1. 技能習得を目的とした批評学習

この授業実践の学習効果は、学生に対して行った意識調査の結果に示されている⁶。批評学習によって客観的な視点を得ることができ、技能習得に有効であることが理解できる結果は、図 2-1. に示されている。批評を行う中で得た技能習得に関わる言語が指導者としての的確な言語に繋がることについて、批評学習が有効であることは、図 2-2. にみられる。さらに、課題を変えて繰り返して批評学習をすることで、書写の学習内容の理解が一層深まると図 2-3. に回答されている。これらは、主に技能習得に関わる、書写の授業における具体的な学習内容であり、目に見える書写の学習内容を理解することへの効果といえる。

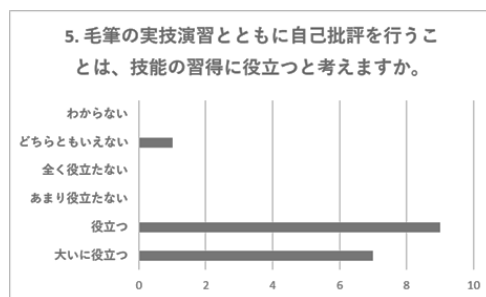


図 2-1. 批評学習の有効性 (1)

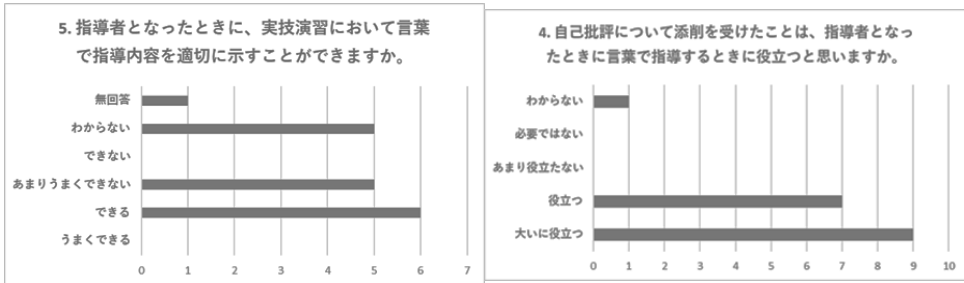


図 2-2. 批評学習の有効性 (2)

指導内容を適切に示すことができるという回答は、17名中6名であるが、記述式回答では13人が、批評学習が指導するときに役立つという内容の回答をしている。回答の中には、「言葉で指導することは、その表現や言葉に慣れていないと難しいと思うので、自己批評をすることは役立つと思う。」「自己批評することで、自分の言葉を用いて客観的に作品を見れる（原文のまま）生徒の作品を見た時も言葉につまらず指導することができると思う。」という、どのように批評学習が有効かにまで言及した回答を得た⁷。

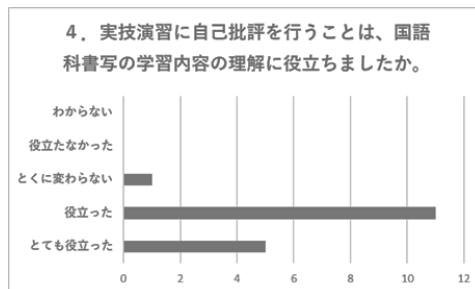


図 2-3. 批評学習の有効性 (3)

批評を取り入れることで得られる学習効果は、身体の学びと知識を得ていく学びが互いに働きかけ合いながら学習を深めていくことから生まれると考える。このような批評学習によって技能習得に学習効果があることは、小中学校国語科書写の教員養成の授業に批評学習を行うことの意義といえるだろう。しかしながら、指導者となる学生ならば、授業実践を行うことに十分な技能を習得し、実践のための知識を獲得するだけでは、不十分であり、授業が実践できるというのみではなく、書写の学習はどのような学びであるかを理解することが求められると考える。そしてそれは、後述するように、文字を手で書く機会が著しく減少した現代の状況と関わる。

学生が批評を繰り返し行なうなかで、文字と文字を書くことに関心を向けていく様子は、学生の批評の内容の変化から見るができる。言語の伝達としての役割を持つ文字と、それを書くことの身体性に関心をもちていくという書写の学習内容の一面は、文字を書く機会が減少している現代では、書写の学習において、これまでよりも強調されなくてはならないことに、学生自らが本授業の批評学習によって気づき、教員として教えていけるようになることが、本授業における批評学習の目的である。批評学習によって、文字を書くなかに文字と文字を書くことに関心を持っていくことを促すことの大切さを自ら見出すこ

とは、やがて教員になる学生がしなければならないことである。本授業の批評学習において、書写の学習の本質を理解して、それを根底に持ちながら指導していけるということが、技能習得への有効性ととも、批評学習をすることの意義と考える。

3. 指導者として書写の学習の本質を理解する重要性

3-1. 書写と書道の学習内容の関係性

学校教育における書道の学習は、書道の美は、文字を書くという日常行われる行為のなかで、「意思伝達のために毛筆で書かれた文字が、その伝達内容とは別に、滲み出た美しさを尊ぶもの」であり、「書美は副次的なもので、美そのものとして積極的に造形されたものではなかった」と表される⁸。そして、高等学校芸術科書道の学習において、技能習得のための学習は、このような書道の美についての学びであることを前提としている。他方、小中学校国語科書写の学習内容が、高等学校芸術科書道と異なる学習内容であるとされる点は、芸術表現として文字の美を学ぶのではなく、あくまでも国語の学習として文字を学び、正しく整った文字を書くための学習であることである。

日本において、書道の始まりから現代の在り方までは、以下のように変遷していったと考えられている。中国から漢字が伝わり、その漢字を墨と筆で書く「書法」が日本に定着し、日本の風土・習慣やそれより先に伝えられてすでに和様化されていた芸術や芸能の影響を強く受けて、次第に和様化し日本固有の芸術や芸能となった。それが「道」と称すべき境地に到達した後に、芸道として成立した⁹。そして、明治時代の西洋美術の概念の流入を契機に、書道は、芸道の特質を持つ表現から近代美術の性格へと変化していったといえる。それまでの師の型を写し取る学習方法ではなく、1880年の楊守敬の来日によって可能となった中国の古典からの臨書学習から始めて、やがて創作していくという現代も行われている学習の形式に変わっていくのである。江戸時代のような、師の書風をそのまままねる学び方は、現在も個人的な教授方法として残っていても、もはや主流の教授方法とはいえない。この点には、芸道の教授の変容というより、むしろ、西洋的な教授方法である、科学的な見地からの技術の修得といえる学習や、タブローとして切り取られた芸術としての発想のもとによる表現を作品としているようにみられる。そしてこのような書道の在り方の変遷によって、書道の表現が持つ意味は、芸術表現として造形美を追求して文字を書くという性格を強く持つようになった。そのことは、書道の表現が、正しく整った文字を書くことと異なる方向性を持つようになった大きな理由といえる。現代では、書道の表現を見るときに、文字の造形美が表現されていることが前提のように考えられており、むしろ、書道が伝達の記号としての文字を書く中に美が見出され、前述した経緯を経てきたことを思いおこすことが難しいのではないか。

しかしながら、文字を書くなかで、言葉を伝える働きをもつ記号である文字が持つ新しい一面を見出し、書かれた文字が持つ美的な要素に着目したことで書道の学びが生まれたことを考えると、書写の学習のなかに書道の学びが潜んでいるということを否定することはできない。むしろ正しく整った文字を学習する書写の学習は、文字を知り文字を書く行為のうちに文字と文字を書くことに関心を持ち、書道の美の視点を養うという一面がある

といえるのではないか。そのように考えると、書写の学習は、書道の学びの原点に立ち返っているとも捉えることができる。書写の学習と書道の学習内容は、文字を正しく整えて書く学習と造形美を意識して文字を書くという学習を分断したのではなく、正しく整った文字を書くことと、美しい文字を書くことの二つの学習目標を共通に持ち、その二つの学習目標の優先順位が異なっていると捉えられる。書道の美が文字を書く中で見出された造形美であるとする、書写の学習には意思伝達を可能にする文字の働きを失くさないことを前提にした造形美の追求という一面があるともいえる。書写の学習は、国語学習を基本とした文字の学びであるから、造形的な美の表現までの技能の学びは目的とされていない。しかし、書道が文字を書く中で副次的に生まれた美を意識するものなら、自分で選択したのではないある一つの例の文字の形の美を追わなくてはいけないとはいえ、実は、書写の学習こそが、書道が本来生まれてきた美の仕組みを見せていると捉えられる。書写の学習には、その仕組みを知り、文字を書くなかに美を見出す学びが存在していると考えられ、西洋の美の探求の在り方によって追われてしまった、本来の日本の美の探求の在り方の視点を実は含有しているのではないか。整正の美を求めるもっと以前の、コミュニケーションのための言葉である文字にさえ美はあり、それを求める繊細な感性に立ち返るという意味合いと属性を、書写の学習が持っているのではないかと考えるのである。

3-2. 現代の問題を意識した書写の学習

書写と書道の学習の関係性から、二つの学習内容を考えると、書写的価値も書道的価値もどちらも重要であり、書写の学習の根幹にはその二つの学習が存在する。文字を書く中に美を見出すことは前提であるということなのかもしれないが、文字それぞれの美がすでに存在するものとして教えるのではなく、自らの視点を持って自らが文字の造形に美を見出すこと自体が、書道の学びの始まりになるのではないか。そのように考えると書写の学習の意義は、文字を整えて書くという実践的な学習であるだけでなく、文字を書くなかに美を見出した日本人の感性を辿る、日本文化の学びの一面があることを確認するのである。

非具象表現が世界的な動向となっていた戦後の美術の気運を反映し、書道の表現における造形美を追求した書道の団体と関わりがあったことから、美学者の井島勉は、『書の美学と書教育』を著している。その中で書写の学習について、「正しく書くことと美しく書くことは同じ理屈にはならない。」ということについて、以下のように述べている¹⁰。

国語科で文字を教えられた子どもたちが文字を書く。一定の約束に従わねばならぬ記号を書くのであるが、現実にどんな大きさと形とで書くかは彼らの自由に任されている。そこにはすでににほどかの美的態度が芽生えているはずであるが、彼らは一向それには気づかずに、ただ誤まらない約束をノートの行間に注意を集中して書いてゆく。そのかぎりでは、彼らの行動はいわば知的な行動であり、ただ文字を書いているのである。ところが、自分の手で文字を書くことの中に最初から潜んでいるはずの美的意味に気づいて、意識的にそれに徹しようとしはじめるときから、文字を書きながらも書を書くという芸術的態度が育ち始める。

井島は書道を芸術表現として捉えており、そのことが反映してこの文章には、書写の学習の概念が文字を正しく整えて書くことだけに切り分けられたようなものではないかという、井島の疑念が見て取れる。書写の学習は、文字を正しく整えて書くことにあり、芸術表現として文字を書くことは学習目標ではない。しかし、井島も述べているように、書写の学習として文字を書くなかに、「なにほどこかの美的態度が芽生えているはず」なのである。学校教育における書写では、言葉を伝える文字に美を認める感性と美を求める姿勢を培うことが、身の回りの文字を鑑賞することを促すような形で学習に取り入れられている。それは、国語の学習目標にある、国語を文化として大切に思う気持ちの育成を造形的な視点から支える、書写の学習本来の他のものに置き換えられない存在意義を持つと捉えられる。文字を意思伝達のためだけのものと認識するのではなく、文字の造形に美を認め、さらに美を追求する姿勢は、教えられるのではなく、自らそれを見出せることが必要であると考ええる。

しかしながら、現代の状況では、そのような視点を自主的に養うことには、文字を書く機会が少ないという日常生活であることが考慮されなくてはならないことに異論はないだろう。言葉を伝える記号である文字を書くなかに、文字が持つ新しい一面を見出すことで書道の学びが生まれたことを考えると、文字を書く機会が減少している現代では、書道の学びの原点となる感性を育む場としての書写の学習の側面を活用することが重要ではないだろうか。現代の日常生活において、文字を書く機会そのものが失われていることを重く見て、文字を書くなかに美を見出していくという視点を意識させることを書写の授業で行うことが必要なのではないか。このような現代の状況では、文字を書くなかで美を見出すという、書道の美の発見の場としての書写の学習の役割は重要になったといえる。そして、井島がこの文章を書いた1950年代よりはるかに、指導者がこの意識を持つことの重要性が高いことは明らかであろう。書写の学習において、文字と文字を書くことを学ぶという学習内容の重要性には変わりはないが、書写の学習は、文字を書くなかに美を見出す過程としての一面を持つのであり、現代ではその機能が重要である。そのような現代の時代性を帯びて書写の学習の意義が再考されることが求められる。書写の学習と書道の学習の違いを意識しながらも、学習者の美的態度の芽を支える指導ができることが、書写の指導者に求められていると考える。小中学校国語科書写の教員養成の授業において、指導者として文字を書くなかに美を見出すことを促す重要性を、教えていく必要があると考えるのである。

また、現代はインターネットやテレビで多くの情報がたやすく得ることができるが、目に入ってくる筆で書かれている文字のなかには、文字の造形を深く追求する経験を経ずに抽象表現としての芸術性を強く打ち出して、それが書道の表現であるとするものもある。書道の表現の形は、明治時代に書道を芸術表現として捉えた時から、またさらに、戦後にも大きく発展した。現代の書道は、西洋美術の表現の方法や発表の仕方を取り入れてすでに久しく、文字を書くなかに見出してきた美というより、造形美を求めることが優先される傾向を反映したものもある。現在、書道の表現とされる多様な表現は、書道の美を求めてきた日本書道が発展した結果であり、その価値には一定の評価がされている。しかし、書道が文字を書くなかに見出されてきた芸術であることへの理解が不十分なうちに、造形性だけを強調した書道の表現を学ぶのではなく、文字を書くことを経て造形美を追求する

段階を経ることがなければ、中国から「書法」が伝わり、文字の造形美を求めて行った日本文化における書道の原点を見逃し、単に字という形の造形美に着目して書きつけられた線は、書道の線と言えないものが含まれてしまうのではないかと危惧する。言い換えると、身体を使い文字を書く機会が減った現代の環境では、書道につけられた価値的評価ともいえるものが、鑑賞対象としてだけの扱いをされているような場合では、ある種の芸術性・審美性が重要視され、文字を書く身体性が重視されていないものを書道の表現として捉えられていることがある。そのように書道が間違っただけの扱われていることがあることを危惧して、書写の学習の意味を厳密に考えておかななくてはいけないと考える。日常において文字を書くことが少なくなり、書道の表現が本来もつ身体性が欠如したような造形美を強く追及した書道作品を鑑賞することで、書写の学習において文字を書くという身体とのかかわりの軽視があるとしたら、それは文字を書くなかに美を見出してきた書道であることが理解されていないことであり、そのことは書写の指導において、現代性の問題として意識されなくてはならないと考える。

4. 批評することで深まる書写の学習内容の理解

4-1. 学生の書写と書道の学習内容の違いについての理解

本授業実践で学生は、学習者として自らが技能習得を行う立場と、書写の学習を指導していく教員としての視点を持って学習している。学生は、書写の授業実践において具体的な内容の指導だけではなく、文字と文字を書くことについて学習することの本質について、指導者という立場での書写の学習がめざしていることについての理解が必要であると考える。学生が指導者となることを意識して、前述したような書写と書道の学習内容について、筆者は意識的に言及している。

その一方で、文字と文字を書くことについて批評を行うという言葉を使った学習によって、学生の批評が、思うように書けなかったというような課題を書いた感想に留まるような内容から、書写の学習の根幹に触れるような内容にまで次第に深められていることに注目してきた。例えば、「楷書を書くときよりも、行書で書いているときのほうが、腕全体が動いているように感じて書きやすかったです。」という批評や「「辺」と「走」の「辶」、「走」の払いの部分が苦手で、やさしく力を抜いていくのを意識しましたが、思いつきり払いたくなくなってしまいます…」という批評は、文字を書く時の自分自身の身体性を意識して、自らの言葉で身体から身体への学びを表したものである。また、「「山」という字も一、二画目の長さが同じくらいになり、全体的に他の字を圧迫してしまっている。」という批評からは、一文字のなかのそれぞれの画の長短を客観的に見て、整った字形を追求しながら、同時にその一画の長さの紙面全体への影響にまで目を配っていることが見て取れる。これらの批評の内容からは、課題を変えて繰り返し批評を行うことによって、批評の内容・文章が深められ充実してきたことを示している¹¹。そのことは、批評を行うという、身体性の学びを言説によって表現する学習のなかで、学生が自分自身の言葉によって書写の学習が目指しているものをすくい取る道筋となっていることを示すのではないかと考える。自分たちが指導することとなる書写の実際の学習の背景にあるべきであることが、批評を通

して実感してくる様子が見えたといえる。

批評からみえるそのような書写の学習内容についての理解を、どのように学生自身が意識しているかを知るために、書写と書道の学習内容の違いについて、記述式による回答を求め、以下のような結果を得た¹²。

質問：書写と書道の学習内容の違いを考えて、自由に書いてください。

回答：D-2・書写は基本的なことの学びで 書道は芸術的なことの学び (?)

D-6・字形を意識し、わかりやすく整った字を書くのが書写で、芸術的な要素が求められるのが書道。

D-7・書写→手本を書き写し、正しい字形・バランスを学ぶことが主な学習内容。

書道→自分の感性にしたがって、美しく字を書くことが主な学習内容。

D-8・実用か観賞用か。

D-9・書写 集中力を養う、書くことに意味あり 書道 字形重視

E-4・書道はあくまで芸術的な分野にまで入るので、ただ字が上手いというだけではいけないと思った。

E-5・書写＝社会的 書道＝芸術的 であると思います。今回の授業を通して見てみると、書写の社会的必要性は高いのではないかと考えました。

これらは、批評学習を通じて書写の学習内容の理解を深めるなかで、書道の学習との違いにも考えを発展させていったものであると考えられる。書道の学習内容についての理解は、記述式で得た回答が示すように、書写の学習内容の理解によって、それと対比する考え方で高等学校芸術科書道の学習内容を理解している内容にとどまるともいえる。しかし、高等学校芸術科書道を選択した学生が17人中1人だけであったという事実を考慮すると、書写の学習において文字を書くなかでの美に目を向ける視点を得たことが、書道という芸術表現を想像できる態度を生んでいるのではないかと考える。

4-2. 行書の批評学習を通して深まる理解

本授業実践では、楷書の技能習得を行い、その後に行書の技能習得を行うが、その二つの書体の学習を比較して学生自身が体得したことについて行った意識調査が、以下のように示された¹³。

質問：行書の学習と楷書の学習について、異なるところについて理解したことを、自由に書いてください。

回答：D-1・行書では、早く書きつつ、流れを意識すべき 楷書では、一画ずつ、位置を確認すべき

D-2・行書は、手本を見すぎると、逆に書けなくなった。楷書は、説明(留意点等)を聞いて書けば上達した。

D-5・楷書は一画一画丁寧に書くが、行書は丁寧さの上に流れを必要としている。

- D-6・楷書・画の方向が決められている。・一画一画を丁寧に書く。
行書・運筆によって画の方向が変わることがある。・文字の流れを重視する。
- D-7・行書→流れを大切にする。手本とそっくり同じに書くことが第一ではない。
楷書→手本を意識して丁寧に書くことが大切。
- D-9・行書 筆の動きが速い より流れがある 省略がある 自分の体の動きにあわせて書く
- E-1・字形をイメージして書かないと、次に手がどこにいくかわからない。
- E-4・楷書が一画一画を丁寧にするのにに対して、行書は次の画へとつなげる流れに重きを置いて全体を仕上げるものと思った。
- E-5・楷書と比較すると行書は、より自分の書きやすい形を求めていく書き方であるように感じ、より芸術的、個的意識の高まるものであると認識した。その為やはり公式な面前では、楷書が重んじられるのではないかと思った。

これらのなかに、行書についての、「手本を見すぎると、逆に書けなくなった。」、「自分の体の動きにあわせて書く」、「より自分の書きやすい形を求めていく書き方」という、身体性に関わる感性を得ている様子がみられる回答がある。まだ理解しきれていない点もみられるが、行書を書く時の身体性の理解を意識に上らせていることが回答に示されている。

これらの回答がなされたことについて、本実践における行書の技能習得の学習時に学生が書いた批評に、先に挙げた例以外にも、「横画のスピードを意識した」、「横画が全体的に遅い」、「二画目、途中で力がつよくなっている。」、「スピード感が足りなかった」という記述があることは、無関係ではないと考える¹⁴。本授業における批評学習を通して、学生自身が自分の身体の動きを言葉にしたことで、それらが行書とはどのようなものであるかという考えにまとめられたと考える。

行書の学習は、書写と書道が極めて近くなる学びの要素があることも見えてくる。前述した意識調査の回答や批評の文章からわかるのは、学生にとって行書の学習を言葉で表すということから見えてくるものが、書写の学習をしながら、「書くこと」の意味が強く見えてくるというような書道との接点であり、身体性の理解へと繋がる道筋となったといえる。これは、身体の動きを言葉にすることができるようになった、その視点を得たということではないか。このように批評を行うことで、文字を書くなかに自分がどのように感じるか、文字に対する感性を磨いていけると考える。

5. おわりに

小中学校国語科書写の教員養成の授業において、言葉による学習を差しはさむ批評学習を行うことが、技能習得の学習に有効であると考え実践してきた。学生が書いた批評の内

容は、その後の実技の学習に反映されており、批評の内容も次第に充実を見せる。また、批評学習についての学生に対する意識調査の結果では、批評を行うことが技能習得に有効であるとの回答を得た。しかしながら、指導者となる学生としての学びは、授業を實踐できる技能や知識の習得だけではなく、書写の学習とは何をめざした学習なのかを知り、そのような深い観点から指導ができるようになることであると考えられる。

小中学校国語科書写の学習内容は、正しく整った文字を書くことを主眼とする学びであるが、文字を書く身体性も学んでいる。文字性も身体性も書道の芸術性の根幹となるものであり、それらを書写で学んでいると考えている。小中学校国語科書写の教員養成の授業において批評を行うことが、そのような書写の学習を深く理解して指導していくために有効であることは、学生の批評の内容が充実していくことに見ることができる。学生の批評は、技能についての記述が的確な表現になっていくだけではなく、言葉によって批評を行うことで、文字と文字を書くことが身体による学習だけに終わらず、一段深い思考を経ることで、関心の深まりに導かれる機会を持つと言える。記述することによって、それまでに蓄積された身体での理解を言葉に置き換えるなかに、思考によって関心を深めることは、本稿における、書写と書道の学習内容の違いと行書の学習と楷書の学習の違いについての自由記述の回答の記述からも読み取れる。身体を使った技能習得の学習と批評を行ったことで得た言語による理解が総合された記述といえる。

また、現代は、日常のなかで文字を書く機会が減少しており、日本の文化として、文字を書くなかに美を見いだすという感性が薄れている恐れがある。現代の文字を書かない日常を考えると、書写の学習である正しく整った文字を書くという行為のなかに、字形や余白に造形的な美を見出すという視点に自ら気付くことが、書写の学習の役割として重要であると考えられる。指導者となる学生自身が批評学習によってその気づきを体験し、その重要性を意識してやがて書写の授業を實踐していけることが望まれる。

本考察によって、小中学校国語科書写の教員養成の授業において批評学習を行うことは、技能習得に有効であるだけではなく、指導者となる学生が、書写の学習内容の一層深い理解を得られることにもその意義があると考えられた。さらにより多くの批評学習の事例を蓄積し、意識調査を継続することで、批評学習の有効性を追究することを今後の課題としたい。

【注】

- 1 田畑理恵「批評と技能習得との関わり —小中学校国語科書写の指導者に求められる技能習得への効果—」『国語国文学の教育法 研究と報告』第1号、都留文科大学文学部国文学科（編）、2017年11月、67-76頁。小中学校国語科書写の教員養成の授業における、自己批評と相互批評の技能習得への関りについて、常磐大学の「書写・書道」の受講者を対象とした調査結果（平成28年度）と都留文科大学の「書写演習D」および「書写演習E」の受講者を対象とした調査結果（平成29年度）を實踐報告として発表した。

この實踐報告、注2に示す實踐報告、そして本稿に関わる調査は、「書道教育において、批評を行うことによって得られる学習効果を究明することを目的とした調査」

- として、常磐大学の倫理審査を経た承認（平成28年1月）と、「言語活動と書道の学習に相乗効果が期待できる批評」を課題とした研究について、都留文科大学における倫理審査を経た承認（平成29年5月）を得て行われた。
- 2 田畑理恵「小中学校国語科書写の指導者育成における批評を通した学習の有効性 ―学生へのアンケート調査の結果から―」『国語国文学の教育法 研究と報告』第2号、都留文科大学文学部国文学科（編）、2018年2月、21-29頁。
 - 3 直江俊雄「創造的な美術鑑賞を目指して」『美術教育ハンドブック』神林恒道／ふじえみつる（監修）三元社、2018年、159頁。
 - 4 シンポジウムの内容は、パネラーによって記述され学会誌に掲載された。その一部を引用する。「新学習指導要領に手書き文字は文化であるという視点が入ったことにより、書写は国語、書道は芸術、と完全に分離すべきもののように捉えがちになってきた流れのよりもどし（原文のまま）が可能になるか。しかし、内容的にそうであっても、現実的に中学校の国語の先生が書写の授業を持ったときに、そこまで理解して指導できるかという問題がある。」齋木久美「どのように書写・書道の指導実践をしていったらよいか ―言語活動を充実する書写・書道の授業を考える―」『書写書道教育研究』第28号、全国大学書写書道教育学会、2014年、63頁。
 - 5 生田久美子（著）『「わざ」から知る』東京大学出版会、1987年、はしがき（vii-viii）。
 - 6 平成29年度都留文科大学の「書写演習D」および「書写演習E」の受講者（17人）を対象に、平成29年12月12日（1人のみ12月19日実施）の授業内に行った意識調査である。アンケートは、回答を選択する質問と、記述式回答が求められる質問から成る。注2の実践報告には、技能習得に関わる結果のみを発表した。その一部を、図2-1.、図2-2.、図2-3. のグラフとして示した。
 - 7 注2の実践報告、田畑「小中学校国語科書写の指導者育成における批評を通した学習の有効性 ―学生へのアンケート調査の結果から―」、23-24頁。記述式の回答の句読点は、表記を統一した。17人中、E-6 および E-7 の2人は、すべての記述式の質問に対して回答なし。
 - 8 『高等学校芸術科書道指導資料 理論編』文部省、1984年、75頁。
 - 9 西山松之助『藝道と伝統』（西山松之助著作集 第六巻）吉川弘文館、1984年、142頁。「芸道という概念には共通するものがあり、それが日本的な特色ある存在であることについては、はじめにそれを規定しておかなければならないであろう。（中略）日本の芸道には、そういう「型」がある。つまりそれが道なので、日本の芸道には、このような規則性が強く存在している。」
 - 10 井島勉『書の美学と書教育』墨美社、1956年、163頁。
 - 11 これらの批評は、平成29年度の都留文科大学における「書写演習D」および「書写演習E」の授業で提出された自己批評である。それぞれの批評は、本文で挙げた順に、「北西（行書）」（2017年10月3日実施）、「海辺を走る（行書と行書に調和するひらがな）」（2017年10月31日実施）、「静かな山の朝（楷書と楷書に調和するひらがな）」（2017年7月11日実施）の課題に対して行われた。
 - 12 意識調査の結果中、本稿に関わる質問と回答。（注2の実践報告には記載されていない。）

- 13 意識調査の結果中、本稿に関わる質問と回答。(注2の実践報告には記載されていない。)
- 14 注11同様、これらの批評は、平成29年度の都留文科大学における「書写演習D」および「書写演習E」の授業で提出された自己批評である。それぞれの批評は、本文で挙げた順に、「秋霜(行書)」(2017年10月24日実施)、「秋霜(行書)」(2017年10月24日実施)、「海辺を走る(行書と行書に調和するひらがな)」(2017年10月31日実施)、「海辺を走る(行書と行書に調和するひらがな)」(2017年10月31日実施)の課題に対して行われた。

【参考文献】

- 1 齋木久美「どのように書写・書道の指導実践をしていったらよいか 一言語活動を充実する書写・書道の授業を考える―」『書写書道教育研究』第28号、全国大学書写書道教育学会、2014年
- 2 直江俊雄(著)「創造的な美術鑑賞を目指して」『美術教育ハンドブック』神林恒道/ふじえみつる(監修)三元社、2018年
- 3 生田久美子(著)『「わざ」から知る』東京大学出版会、1987年
- 4 『高等学校芸術科書道指導資料 理論編』文部省、1984年
- 5 西山松之助『藝道と伝統』(西山松之助著作集 第六卷)吉川弘文館、1984年
- 6 井島勉『書の美学と書教育』墨美社、1956年

Received : October, 1, 2018

Revision received : December, 14, 2018

Accepted : December, 20, 2018